

オゴノリと石花菜

瀬木紀男

先日或る税関吏が大学の研究室に突然来訪され、本邦に輸入されたマカツサル（セレベス島）産海藻の鑑定を小生に依頼された。調べてみるとこれは寒天の混和材料として用いられるオゴノリ（シラモも混入）であつた。彼は筆者に輸入税表（The Import Tariff of Japan, 丸善発行, 昭和28・9・20）を示して、オゴノリ、石花菜及びアイリッシュユモスに就いて尋ねられた。その表の p. 76 雑品の部には次の如く示されてあつた。

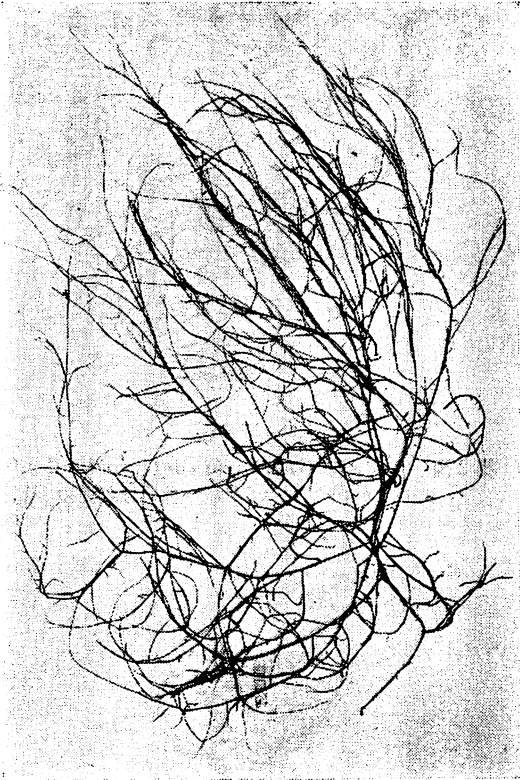
番 号	品 名	Description	税 率
Nos. 1702	ふのり、石花菜及び アイリッシュユモス	“Funori” (<i>Gloiopeltis</i>) “Sekkasai” (<i>Gelidium</i> <i>corneum</i>) and Irish moss	無 税 Free

この表中先ず不可解なことは Description の項にて石花菜の説明に括弧して *Gelidium corneum* と一種のみを指定してあることである。この種類は従来は本邦に産しないとされていたが、筆者の研究により本邦附近の南海に産することが明らかになつたもので4つの var. (*β sesquipedale* GREVILLE; *γ pinnatum* GREVILLE?; *δ pulchellum* GREVILLE; *ε clavatum* GREVILLE) を含むテングサの一種で、学名は *G. corneum* (HUDSON) LAMOUREUX (和名なし) と云う。猶この詳細については後日発表する予定である。

第3図に示した *G. corneum* の一種はかなり大きくて約9.5 cm 高く、主枝は約1.5 mm の幅あり扁平にして軟竹質、赤紫色を呈し、その内部構造(第4図)は一層の皮層細胞を持ち、根様系は中心と皮層の中間に密集する。いづれにしても *G. corneum* はテングサ属の中でも特定のものであるから、輸入税表中に石花菜の説明として、特に之のみ掲げることは不適當であり、フノリの説明に *Gloiopeltis* と指定してある如く、*Gelidium* とのみ示すことが最も適當であると考え。蓋し石花菜とはトコロテングサ即ちテングサの漢名で、狭義にとればテングサの一種類に限定されるが(本邦では普通 *G. amansii* をさす)。広い意味でテングサ属を指すと解釈した方が妥當である

う。樊恭炬氏(台湾基隆水産試験場)の論文「台湾之石花菜及び翼枝菜」が英文では“The Genera *Gelidium* and *Pterocladia* of Taiwan” (1951) としてあり、また CHAPMAN 教授も *Seaweeds and their uses* (1950) の p. 92 に The last name (“Tengusa”), however, would seem rather to refer to the genus *Gelidium* as a whole and not properly to this species (*G. amansii*) とあることから推察される。

今輸入されたオゴノリ *Gracilaria confervoides* (L.) GREV. (第1図) は緑色をおびた紫褐色を呈し、約27 cm 高く、主枝の径は約1 mm 位あり、円柱状線状を呈して分枝多く、本種と類似のシラモ *Gracilaria compressa* (AG.) GREV. (紫紅色) とは外観のみでは区別し難いことが屢々ある。然



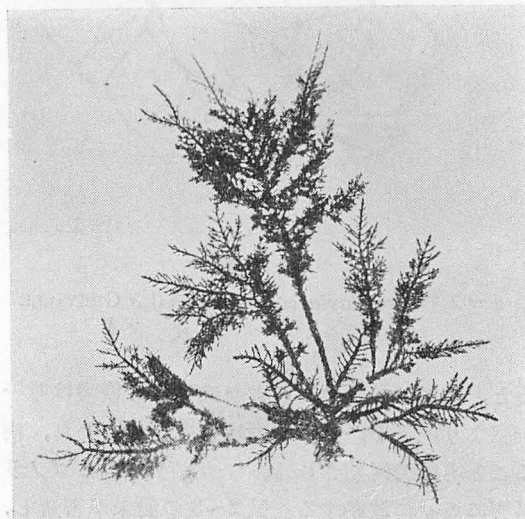
第1圖

オゴノリ *Gracilaria confervoides* (L.) GREVILLE
マカッサル(セレベス島)産 $\times \frac{1}{2}$

し体の横断面をしらべてみると、前者は多層の皮層より成るが、後者は唯一層の皮層のみで大きな内部細胞より成る事、且つ前者は枝の基部くびれ、内部組織の細胞は厚膜を有すること等にて区別される。マカッサル産オゴノリの嚢果は円形をなし、枝の諸所に点状に散在する。又2~3の嚢果が密着し、全体として一つの小さな点状のかたまりとなり、それが諸所に散在する。猶オゴノリは漢名にて頭毫菜、於期菜、竜鬚菜、頭髮菜等シラモは竜鬚菜等と称



第2圖 オゴノリ *Gracilaria confervoides* (L.) GREVILLE
マカッサル(セレベス島)産 体の横断面の一部 ×98



第3圖 *Gelidium corneum* (HUDSON) LAMOUROUX
var. β *sesquipedale* GREVILLE 臺灣産 ×約 $\frac{1}{2}$

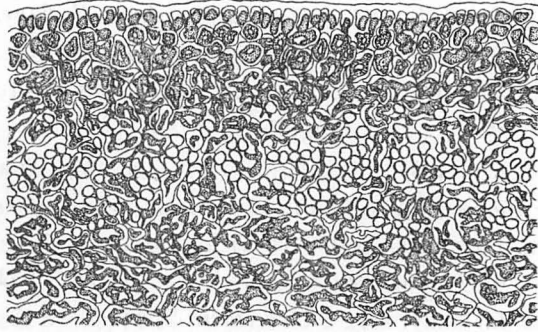
するようである。

寒天製造の際には、このオゴノリは配合材料として必要なもので、生産価格をひき下げる事、外観をよくする事(所謂「角がたつ」事を防ぐため)、溶解力、凝固力を適当にするために、テングサに混和するものでその割合は地方地方で独特なものであるが、信州地方では親草(テングサ)60~80%、雑草(オゴノリ等)20~40%位と言われている。斯様に寒冷な信州地方ではよく用いられるが、温暖な関西地方ではあまり用いられない。然し近時オゴノリのみで寒天代用品を作成し得るというから益々重要な海藻となろう。

最後にアイリッシュモスとは *Chondrus crispus* (CHAPMAN による)を指し、オゴノリはチャイニーズモスに属し、前

記の表中にはない。他にセイロンモスと云うのはカタオゴノリ (*Gracilaria lichenoides*) の別名である。

オゴノリが南方から多量に輸入されることは屢々聞いていたが、実際にこの問題に当り、いろいろな事を考察し得たのははじめてであったので、興味ある事実として報告する次第である。



第 4 圖

Gelidium corneum (HUDSON) LAMOUROUX
var. β *sesquipedale* GREVILLE
体の横断面の一部 × 265

(三重縣立大學水産學部)

オゴノリの學名變更について

近 江 彦 榮

寒天原藻の一つとして最近特に重要視されるに至つたオゴノリは、世界中に分布する *Gracilaria confervoides* に同定されていることは周知の通りである*。ところが最近、PAPENFUSS (1950) は *Gr. verrucosa* (HUDSON) PAPENFUSS なる新結合名を提唱し、*Gracilaria confervoides* (L.) GREV. をその異名としている。北米太平洋沿岸のオゴノリ科を研究した DAWSON (1949) も、最近の論文 (1953) にこの新結合名を採用している。それで PAPENFUSS の論分に基いて学名變更の由来を紹介したいと思う。

Gr. confervoides なる学名の来歴は、1809年に STACKHOUSE が新設した *Flagellaria* 属にさかのぼることが出来る。彼はこの属に6種を設けたが、この *Flagellaria* なる属名は LINNAEUS が既に1753年に顕花植物の1属の名に用いたものであつたので、GREVILLE (1830) は STACKHOUSE の6種の一つ、*Flagellaria confervoides* を土台として *Gracilaria confervoides* を提案し、STACKHOUSE の他の3種、*F. verrucosa*, *F. gracilis*, 及び *F.*

* 岡村博士の“能州の海藻”植物學雜誌, 7 (75), 1893年 (明治26年) の目録の中にあるのが、日本に於ける最初の記載ではないかと思う。